

Factors associated with healing of artificial ulcer
after endoscopic submucosal dissection with
reference to *Helicobacter pylori* infection,
CYP2C19 genotype, and tumor location:
Multicenter randomized trial

メタデータ	言語: jpn 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芳澤, 社 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3188

論文審査の結果の要旨

Helicobacter pylori (HP)の除菌は、胃炎や胃潰瘍の治療のみならず、胃癌の予防にも効果があるという前向き研究もある。従って、本邦で良く行われている早期胃癌を対象とした粘膜下層剥離術 (ESD)をうけた患者にとっても、その除菌が潰瘍の治癒を改善したり、胃癌の再発を予防したりする可能性がある。一方、潰瘍の発生機序から、除菌と同時に胃酸分泌抑制薬(プロトンポンプインヒビターPPI)を用いれば治癒効果がより良くなると予想される。申請者はその PPI を代謝する CYP2C19 の genotype により、PPI(今回はランソプラゾール)の効果が異なり、ひいては、潰瘍治癒に差があるであろうと予想した。申請者は、96 例について ESD 前後で除菌(3 剤除菌療法)をするというデザインで、HP の除菌後の ESD の治癒過程を CYP2C19 の代謝能を加味して HP 除菌なしで ESD を行った群(ESD 後除菌)と比較し、その修復過程に差が生じるかどうかを検討した。CYP2C19 は genotype 別に rapid(RM), intermediate(IM), poor metabolizer (PM)にわけ、潰瘍の縮小率、潰瘍局在部位、平均処置時間、癒痕率などを比較した。その結果 PM 群にくらべ、RM 群では潰瘍の縮小率が減少しており、また胃の下部のほうが上部、中部よりも縮小が良好であったが、除菌の有無自体による ESD の治癒率の差は見られなかった。本研究はエビデンスレベルの高い前向き臨床試験であり(UMIN000015790)、この結果は今後の臨床実務の基礎となる情報であるので医学博士論文にふさわしいと審査員全員で結論した。

以上により、本論文は博士(医学)の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 梶村 春彦

副査 須田 隆文

副査 和田 英俊